

『西鶴諸国はなし』 卷一之五「不思議のあし音」の遊戯

— 方法としてのなぞ問答 —

梁 誠允

はじめに

貞享二年刊『西鶴諸国はなし』（五卷五冊）は、西鶴が「人はばけもの、世にない物はなし」との感慨を込め、諸国の奇談三十五話を収めた短篇説話集である。かつて中村幸彦は、「西鶴の話術——説話性」を考えるにあたって、「先行した仮名草子の怪談本や教訓的説話の概念的な話から見れば、具体的な描写や微妙な精神心理の動きをまで伝えることを可能にした、西鶴の構成の歴史的意義は勿論認めねばならず、短編構成方法の様々な可能性を含んでいることも注目すべき研究課題^①」と提言した。西鶴が作り出した説話世界の新しい内実や咄の語り口を論じる際、相変わらず有効な指摘だと考える。本稿は、卷一之五「不思議のあし音」

を取り上げ、この話が〈なぞ文芸〉の様式を巧みに利用していることを指摘する。同時に、聞き手に咄の面白味を如何に効果的に伝えているか、その語り口を考察しながら、本話の短編構成の特徴を明らかにしたい。

「不思議のあし音」の梗概を次に示す。

中国の公治長は鳥の声を聞き分け、本朝の安倍師泰は、人の声を聞き吉凶を占うことができたという。その末流とでもいうのであろうか、伏見の豊後橋の片ほとりに、心を行く水のようにして悠々と世を送っている、一節切を吹く盲人がいた。並の人とは思われない。常に一節切を吹いて、万事の調子を判断すると、それがめったにはずれることがなかった。九月二十三日、伏見の間屋町の北国屋という家の二階で月待の行事が

行われた。旦那山伏の多聞院がめでたき事を語り、機嫌がよくなった北国屋の主人は、月待講の客に勧められこの盲人を招いた。遊興の場が開かれる中、油差しを運びに二階に上がってくる小坊主の足音を聞き、盲人は「油こぼすよ」といった。ずいぶん気をつけていたが粗相する。居合わせた人々は皆感心し、それでは今大通りを歩いている人は、どういう人かと次々と問う。盲人は足音の調子を聞き合わせ、北国屋の前を通る四組の人物達を言い当てていく。

最初に登場する二人に対し、盲人は、男が老女の手を引いていくが、取り上げ婆だろうという。本当かと、人をやって様子を聞くと、産婦の夫と産婆であった。次に通る者のことを尋ねると、盲人は、一人の足音だけが二人であるという。たしかに小娘を背負っている下女であった。次の者はと聞くと、鳥類だが大変気をつけて歩いていると答える。また見に行くと、高足駄の行人であった。最後にもう一度と所望され、人の通るのを待っていると、初夜の鐘が鳴る頃になって、下り船に急ぐ武士と下男が通る。盲人は、二人連れで一人は女、もう一人は男だろうという。今度ばかりは違うと、確かめにやると、武士は男装して買い物しに大坂

へ下る、五条の「おかた米屋」(女主人の米屋)であった。

これまで本話は、「音曲―笛に靈妙を得た者の神秘的な力を描こうとした」話とされてきた。あるいは、貞享元年刊『諸艶大鑑』卷三之三「一言聞身の行衛」に「伊勢の右望都」の逸話が挿入されていることから、本話の盲人も、大評判の調子聞きの右望都よもちを素材に「芸の達人として描きつつ、その人間性にも触れている」とし、その点に本話の特色があると指摘されてきた。一方、言い当てられる四組(男と産婆・下女と小娘・高足駄の行人・おかた米屋と下人)については具体的に検討されず、それらが「老・若、恋」「大人・子供、教育」「釈教無常」「金銭」という「絶妙な人生のパノラマ」⁽⁴⁾のような印象を与えていると評されるのみである。特異な奇人が登場するためか、素材への関心が中心となっていたといえよう。まず、表面上は一節切の盲人という奇人の逸話に見えるこの話において、本話が具体的にはいかに語られていき、その展開において奇人はどういう役割を果たしているかを検討する。

一 奇人逸話からなぞ解きゲームへ

右望都については、従来言及される文献に『窓のすさみ・追加』(写本)・『槐記』(写、享保九年序)等が挙げられる。

前者は明暦大火の前年の冬に「四方^{よもい}」が江戸にいて変事のあることを予知する話であり、後者は京都は危険と察知した「よも都」が愛宕山に避難したところ、むしろそこで崖崩れがおきて彼は圧死したという話である。前田金五郎によれば、『槐記』の記事は谷重遠『泰山集』（享和十三年成）に見える、太閤秀吉時代の別の調子聞きの「森本検校をすりかえた伝承とすべき」とするなど、伝承には不明瞭なところもあるが、いずれも天変地異を予見する伝承となっている。

また、『諸艶大鑑』卷三之三「一言聞身の行衛」に右望都が少女の一言を聞いて遊女になると予見する話材がある。これについては、水戸光圀に仕えた日乗上人の日記にも、「よも一」が人の将来を占うという類似の逸話⁽⁶⁾が見える。しかし、「不思議のあし音」は、吉凶禍福や未来を占う話ではない。何よりも右望都是一節切とは関係がない。要するに、一節切の盲人は、右望都がモデルであるとはいえない。『西鶴諸国はなし』の目録において、本話の章題には「伏見の間屋町にありし事」と話の舞台が傍書され、さらに「音曲」という小見出しが付けられている。ここから、本話において、音曲すなわち一節切の名人という要素が重要であると仮定してみたい。咄の枕に当たる冒頭部に一節切を吹

く盲人を登場させることで、聞き手にはどういうイメージを呼び起こしているか。西鶴の同時代に盲人で一節切の名人ならば、中村宗三が挙げられる。『日本永代蔵』（貞享五年刊）卷二之三「才覚を笠に着る大黒」に、町人としての本分を忘れ、生活には何の役にも立たない芸道に深入りした長者が、一節切の奥義を追求して「宗三に弟子となり」とあるように、当時、庶民の楽器として愛好された一節切と、この宗三が結びついて理解されたことが窺える。

ここで、中村宗三の著した寛文四年刊『糸竹初心集』を参照したい。本書は、一節切・三味線・琴のはやり唄の歌詞と音高が記録されている希少な音楽入門書であり、近世邦楽最初の文献である。馬淵卯三郎の研究によれば、寛文・延宝・天和・貞享・元禄・正徳年間までの数十年に及ぶロングセラーであり多数の追随作を生んだとされる。当書の下巻には、中村宗三による調子論が開陳されている。それによれば、調子とは天地の間に陰陽造化の気が満ち溢れ、自然の声音として物を通じて顕れる道理であり、「天地の妙、一気の流行不息の印^{しるし}」であるとする。調子を聞くことはその「印」の顕現を解説することであり、古人は「牛の叫、馬の嘶くを聞き、杜鵑一声に世の乱るゝ」を知ったが、今、一節切を口に任せて吹く我々も「天地鬼神の心に

かなひ、妙音の不思議の声を調べ、生長化収のみちをしらんがため」に存在するという。

「不思議のあし音」の盲人のモデルを中村宗三⁽⁸⁾に特定できる根拠はないにしても、一節切の盲人が特殊な能力を発揮する設定は不自然なものではない。そして、一節切の盲人が天地異変の予兆を捉えるのではなく、人の足音を聞き分ける設定に変えたところが西鶴の独創といえる。

咄の展開において、この一節切の盲人が果たす役割について確認しておきたい。咄の冒頭には「唐土の公治長は、諸鳥の声をき、わけ、本朝の安倍の師泰は、人の五音をきく事を得たまへり」と書かれている。安倍師泰については不明であるが、恐らく陰陽家の系譜を継ぐ人物と理解されよう。起源事典『枯杭集』（寛文八年刊）にも言及されるように、占い師や調子聞きといえは安倍晴明であり、また安倍晴明と道満の道力比べの逸話が著名である。浅井了意の『安倍晴明物語』（寛文二年刊行）巻二「安倍の童子鳥語を聞ける付晴明といふ名をたまはりし事」には、鳥の声を聞き、天皇の御悩みを解いた安倍晴明の神通力が試される話があり、また続く「道満と安倍晴明知恵くらべの事」⁽⁹⁾にも、安倍晴明の道力が試される話が示されている。両話に共通する話のパターンは、安倍晴明が占いを仕損じたと周

りの人々から指さされ、大いに恥をかいだと思われるやいなや、実は晴明が正しかったという反転の形式である。神通力を際立たせ、賞賛するための典型である。

「不思議のあし音」においても、最後の〈おかた米屋と下人〉の言い当てに對して、盲人は「宵からの中に、是計が違ひぬ。我く見とめて、なる程大小さして、侍衆じや」と皆に疑われたが、ついにはその優れた能力が立証されるという反転の形式がとられている。しかし本話は、安倍晴明の話のように、盲人が超越的能力を発揮し、すべてを看破する話とはなっていないことに注意せねばならない。正確に言えば、この盲人は正体を完全には見抜いていないのである。最初の〈男と産婆〉をのぞいて、後の三組に對しては、〈下女と小娘〉は二人だが一人、〈高足駄の行人〉は鳥の類、〈おかた米屋と下人〉は女と男だというだけである。そうした盲人のことは手がかりに、北国屋の主人と月待衆が人をやつて一々確かめていくことで、四組の存在と彼等の言動に注目を促すような語り方となっている。要するに、「不思議のあし音」は奇人逸話型の枠組みを構えた上、盲人が次々と一種のなぞかけを重ね、聞く側がそれを解くという問答型のなぞ解きゲームとして造形されているのである。

二 仕組まれたなぞ遊び

本話の具体的な展開の仕方、語り口を問題にして、さらに論を進めたい。本話は二十三夜の月待を背景にしている。月待は特定の月齢の夜に人々が集い、月読尊の掛軸を架け供物・献燈を用意し誦詞をささげ、飲食・談笑をしながら月の出を待つことである。この集団を「月待講」と呼ぶ。正・五・九月の二十三夜待が最も普及し、中でも二十三日だけが「七夜待」と「六斎日」の行事とが絡んでいたことから、特に重視されていた。^⑩「不思議のあし音」でも、北国屋の主人に旦那山伏の多聞院が「めでたき事どもを語り、主人は嬉しさのあまりに「何によらず、御遊興を御好み次第」と座中という場面がある。おそらくこの七夜待の風俗を描いているのであろう。近世において月待は、元々の物忌み籠居の意が失われ、いたずらに宴遊が中心となり、夜明けまで遊興に時を過ごす寄合の場が催されていた。そしていま、北国屋が頭屋になって談笑の場が開かれ、大通りを歩く人々の正体を見抜くゲームが始まったのである。

座中の要望に応じて能力を試されている盲人は、最初に登場する一組の二人に対し、「男」と「老女」を分別し、足取りの忙しさから「取揚ばゞ」と答える。この二人だけは

盲人が自ら正体を特定する。だが、続く三組についての盲人の答えは、いかにも奇妙である。その発言と大通りを歩く人物達の対応関係とをそれぞれ摘出して記すと、次のようである。

・「二人じやが、^{ひと}独のあし音」——「下女、小娘を負て行く」
・「是は正しく、鳥類」——「行人の鳥足の高あしだ」
・「二人づれ也、一人は女、一人は男」——「五条のおかた米屋」と下男

北国屋の主人と月待講衆は、人をやって正体を確かめるのであるが、盲人の言い当ては推理的要素を含む言葉となっている。言い換えれば、聞き手にとって盲人の発言は、ある種のなぞの提示とも言え、この問答型のパターンが次々と積み重ねられる形で、話は進行している。要するに、「何ぞ何ぞ」と問いかけ、その間に答える形式、いわば言語遊戯の一種の「なぞなぞ」にほかならない。

鈴木棠三によれば、なぞの構成は、形態的に問と答との二段から成る「二段なぞ」（單式なぞ）が基本であるが、元禄の後期から三段形式のなぞ、すなわち「：トカケテ、：ト解ク」に、その「心ハ：」という形を添えた「三段なぞ」（複式なぞ）が作られるようになり、「なぞ本」の出版の面でも、三段なぞの本がやがて享保期に興隆を迎え、主役を占

めるに至ったとする。「不思議のあし音」では、西鶴は二段なぞ型の設問を提示しながら話を紡ぎ出していく。まず、〈男と産婆〉の登場を導く叙述の進め具合を見てみよう。重宝記・大雑書の類ではいずれも、二十三夜の月は「子の刻二分」にのぼる。最後の〈おかた米屋と下人〉が登場するのが「初夜の鐘のなる時」であるから、四組の登場は、まだ月は昇っていない暗夜を背景としている。盲人は最初の二組について、「是は老女の手を引」き、「男は物おもひして行」くという。この夜の時間に駆け落ちにしても変な組み合わせで、好奇心をかき立てつつ、いきなり、実は産婦の夫が取上げ婆を呼びに行っていただけであつたとし、意外性を際立たせている。なぞの構成様式とは、日常のありふれた事象を答えとしてひきだすのに、思いがけない物にとえて問いを掛けるのが基本である。そして、答えが分かつた時にその意外性が納得されるところに、なぞの妙味があるわけである。最初に登場する男と女の二人において、聞き手には、そのようななぞの発想の仕方をじゅうぶんに感じられるような語り口となっており、自然に談笑的雰囲気醸し出されるのである。

次に登場する〈下女と小娘〉に対しては、盲人は「二人じゃが、独ひとのあし音」と答え、聞き手になぞを掛ける語

りとなっている。二人だが一人だという奇妙な設問の答は、「下女、小娘を負て行く」とあつて、子守の仕事をしている下女の様子であつた。

ここで、なぞ設問の仕方を考えるにあたり、従来の〈なぞの型〉についてふりかえってみる必要がある。古典なぞ（二段なぞ）の型には大きくわけて、①「取意型」・「言替え型」、②「賦物型」、③「観察型」という三つの形式が挙げられる。①「言替え型」のなぞの場合、室町時代成立の宸翰本『なそたて』から例を挙げれば、「破れ蚊帳―蛙（蚊入る）」「因果歴然―むく犬（報いぬ）」のように、設問内容の意を取引し言葉の組合せを替える形式の言語遊戯である。そして、中世なぞの主流を成すパズルの性格の強い②「賦物型」のなぞは、設問中の仮名文字の入替え・消去・挿入・転倒など、連歌の賦物の技法を施して発達したものである。例えば、「妻戸の間より帰る―松」（『なぞだて』所収）の場合には、「妻戸（ツマド）」の「間（マ）」から上へ「帰」って読むことで「松（マツ）」と解く形である。また、いろは歌の文字・十二支の順序など種々の現象を観察した知識に基づいてなぞ文句を創作する③「観察型」は、「ひつじ―馬の尾」（『寒川入道筆記』所収）のように、十二支の「未」が「午」の後だから「馬の尾」と解く。いずれも言

葉遊びとして洗練された、技巧的性格を持つものとなっている⁽¹⁴⁾。だが、これらの古典なぞと、西鶴の話の二人だが一人だという問いの形とは、なぞの設問の仕方が異なる。日本にはもう一つ別のなぞの流れとして、民間伝承による二段なぞがある。この民間伝承によるなぞには、全国的に分布する「二人坊主に袈裟一つ」「二人して一筋冠っているもの」「御坊様二人に数珠一輪」(いずれも答えは、「火箸⁽¹⁵⁾」)のように、設問の内容にクイズの要素を濃厚に持たせて、事物の外見を描写する例が多い。つまり、これらのなぞは「描写型、乃至は比喩的描写による『なぞ』が圧倒的に多く、しやれに基づく『なぞ』や思考的傾向の『なぞ』は極めて少ない⁽¹⁶⁾」のが特徴である。当然ながらこれら民間伝承のなぞは、民話と影響し合う例があり、殊になぞを素材として利用する難題話型の民話にもよく見られる。例えば、民話の「馬二頭に鞍一つ」(『日本昔話通観』第二十五巻所収)は、貧乏な怠け者が金持ちになった(実は知恵ある妻の援助による)のを不審に思ったお上が、彼に「馬二頭に鞍一つ」をつけてこいと命じると、妻は機知を発揮して「孕んだ馬」に鞍をつけて連れていかせる笑話である。これを、なぞ問答の形式に仕立てれば、「馬二頭に鞍一つ トカケテ 孕んだ馬 トトク」というふうになるが、「不思議のあし音」の

〈下女と小娘〉の場合も、まさにこのようなナンセンス的な形容描写型のなぞといえよう。

三番目に登場する、高足駄の行人は、「是は正しく、鳥類」が大変注意して歩いていると盲人は答える。これも、ものの外形を端的に表現するなぞとなっている。例えば、各地方で採集された民間伝承による「なぞ」のうち、「青いお皿に火が一杯」(答―西瓜)のような比喩的描写や、「三つ目小僧に歯が二枚」(答―下駄)・「一本足で日本中を飛び歩くもの」(答―からかさ)・「一本足の目一つ小僧」(答―針)、そして民話の「蟹問答」にも見られ、また単独でも採集された「四足八足大足二足天に眼があるコレナンジヤ」(答―蟹)のように、見立て型の民間伝承のなぞの部類に属するのである。

ちなみに、この高足駄の行人は、「一つばの高木履、頭上に手桶を頂、水を入、首にはがねをかけて聞わけがたき節をうたひて是をたゝく」(元禄三年刊『人倫訓蒙図集』七)と記されるように、異様な服装で特殊の儀式を行う民間宗教者であった。後代の風俗随筆の類を紐解けば、『嬉遊笑覧』(写、文政十三年序)巻之十一には「千日詣」の時にも活躍し、『四季交加』(寛政十年刊)には「七月」の風俗に紹介されるなど、実際に、高足駄の行人が二十三夜の月待の日だけ

に出没し活動していたとは言えない。だが、この月待の行事がある日は、彼らにとつて活躍の出番であつたのである。

以上のように、盲人の言い当ては、奇抜ななぞの設問という形で示されている。そのなぞの間に導かれて、聞き手は、何ぞやと不思議に思いながら奇妙な存在に注意するわけだが、正体が明らかになると、実はいかにもありそうな、伏見の市井の人々の姿であることが納得される。なぞ問答という《遊戯の場》が話の中に巧みに仕込まれているのである。

三 「おかた米屋」の造形

では、四番目の《おかた米屋と下人》については、なぞの設問がどのようになされているか。盲人は「二人づれ也、一人は女、一人は男」と言い当てるが、この言葉だけでは、なぞの間が成立しない。今度は座中も、窓を開けて該当するものの登場を待っている。武士と下人の姿がぼんやりと見えると、人々は盲人の発言に対し「宵からの中に、是計が違ひぬ。我／＼見とめて、なる程大小さして、侍衆じや」という。盲人は女と男といい、座中の人々は侍衆（男と男）と判断するところに、なぞが生じるのである。すなわち、なぞの形式で言い直せば「女だが男、これは何ぞや」とか

けて、大坂に下る「五条のおかた米屋」と解くというふうになる。正体がわかつた途端に話は終わってしまうが、一見したところで、前の三組までのなぞ問答と違って、なぞの妙味がすぐには把握できない。遊戯としてのなぞなぞは、解かせるためにあり、解かせて共に楽しむものであるが、その解き方、つまり答えが納得できる筋道に面白さがある。そもそも、なぜここに「おかた米屋」が登場するのか。

京都の米商人が直接、夜に大坂に下るという行為の意味合いについて確認しておく。元禄三年刊『人倫訓蒙図彙』巻四の「米屋」の項目に「米は諸国より大津、大坂につくを分散して、京につける」と記されているように、京都における米の流通は、背後に控えた大津と全国中央市場の大坂の両市場が需給ルーツの基軸となる。高槻泰郎によれば「京都では、大坂と大津の価格を比較し、より安い価格をつけている市場から米を購入したため、両米価は中長期的には連動する関係⁽¹⁸⁾」にある。従つて、個々の米商人は独自の方法で少しでも大坂市場の情報を仕入れようと努力していた⁽¹⁹⁾。また、実際に京都や大津の米商人が大坂の米商人と取引をする場合の慣行として、売買の注文は書面を通じて済ませるのが一般的であつた。言い換えれば、西鶴の話の米屋の女主人が米の買い付けにいくのだとしたら、それは、

どうしても面談が必要な特殊事情があることが聞き手に暗示されるのである。ここで『西鶴織留』（元禄七年刊）巻一之一「津の国のかくれ里」を参照したい。作中には、摂津伊丹の酒屋の総領息子が好色にふけり島原で遊ぶ中、偶然、米相場に関わる秘密情報を得る場面がある。江戸の手代からの速報をもらった隣の床の客は、次のようにいう。

是は目出たや、金銀掴取の内証、江戸の手代より申越した。関東筋、大風ふきて、八木、俄あがりなれば、是より大坂にくだりて、西国米、大分買込、あがり請たれば、太夫を根引にして、我等が奥様にする事ぞと、此たびの仕合を祈れ、夜が明次第に爰を立ぞ。

これを聞いた息子は、すぐさま「首尾かまはず立帰り、早駕籠いそがせ、伏見より飛脚舟かりて、其日の四つ前に、大坂の北浜へつきて、問屋をひそかにかたらひ、米大分買こみけるに、はや昼よりあがりて、只一時のうちに、三拾八貫目丁銀にてもうけ込」んだ。「不思議のあし音」の場合、具体的にどのような事情があるかは話の内部からは見出だせないが、「おかた米屋」が今、商機を得るため何らかの情報を持って密かに動いていることをほのめかすことだけで、ここでは充分である。

そして、「おかた米屋」つまり米屋の女主人の造形には、

異性装の要素が加味されている。「おかた米屋」についてのなぞ設問の根幹をなす、女であり男であるという設定の由来である。本話では、女の正体を隠して大坂の米市に行くための変装であろうが、武士の格好に装っている。女主人が下男に「夜道の用心」と言っている点に注意したい。当時、追い剥ぎやゆすりにあう危険を恐れ、町人も侍の格好をして旅に出る場合があった。俳諧には「武士に成たる旅のふるまひ 仙可」（其角編『花つみ』）・「似せ侍神はうけずや旅心 洞雨」（才麿編『俳諧坂東太郎題』）等、旅中の偽武士は多く詠まれるものであった。『類船集』の「侍」の項にも「道中は商人も職人も侍のふりをさせてとをるなり。侍かとおもへばにしきのひたたれをきたりとも」とあり、「武士」の項にも「道中、江戸くだりの商人の武士にならぬはなし」とある。

このように、「おかた米屋」の造形においては、女性が大胆にも武士に変装して正体をごまかし、旅の危険を避けるために用心を図り、密かに大坂の米市にいくこうとする用意周到な商人の行状が巧みに形象化されている。勿論、やや誇張化した架空の人物である。だが、先手をうつて営利を追い求め、大坂米市に取り組むという、油断なき米商人の人物像は、同時代の現実をふまえたものであり、この米

屋の女主人の劇的な登場が、その現実味をさらにましめているといつてよい。

四 なぞ問答型の変容

以上、なぞ問答の様式によって、本話の構造が形作られており、聞き手に四組の人物達の行状が面白く提示されていたことを確認した。なぞ問答は、それ自体はもちろん西鶴の独創ではない。問答の形式は、古典なぞ（二段なぞ）の基本的な構成形式であり、また、なぞを取り込んだ文芸も様々な形で存在していた。以下では、先行のなぞ文芸と比較しながら、本話の独特の表現方法、つまり聞き手を惹き付ける魅力を考察する。

まず、口承文芸の世界でなぞ問答を活用した例として、「蟹問答」がある。これは描写型の口承のなぞを取り込んで、問答を仕掛けられた旅僧が化物の正体を見破って退治する話である。また、民話の難題話・難題婿（なぞ解き婿）の話として代表的な例を挙げれば、「鶴女房」と「播磨糸長」がある。前者は、正体を見破られた鶴女房が水を満たした皿に針を立てて夫のもとから去り、夫はその皿と針のなぞを座頭の助けで解いて「播磨の皿が池」を訪ね、羽のない鶴になっている女房と再会する話である。後者は、旅の男

がある娘を見初めるが、娘は皿に水をはり糸を通した針を立てて去る。男は座頭に、播磨国の糸長町の皿屋水衛門の娘だと教わって婿になる話となる。いずれも相手の居場所を暗示するなぞが示され、それを解くもので、「取意型」「言替え型」のなぞが利用されており、短いながらも面白さに拠って構成される昔話である。

次に、仮名草子・笑話の中では、『似我蜂物語』（寛文元年刊）下巻の十三「鶏の事」がなぞ問答を話の枕に部分的に利用している。これは、話の枕に「なぞく」、「いろはほへ」と「なあに、そばなる人、それは『にはとり』。さてくよくもとき待るものかな」と書き出してから、商売のためたくさん鶏を殺した報いで現世で鶏になってしまう因果応報の主題に入る話（なぞは「いろはほへ」と「鶏（には取り）」で観察型）である。また、『武左衛門口伝ばなし』（天和三年刊）上巻の七「くだりなぞのそさうもの」では、「南無阿弥陀仏 貉（むじな六字名）」のなぞが素材となっている。これは、『月庵酔醒記』『謎だて』（室町期成）所収のなぞを取り入れて、話を膨らませた形のものである。『醒睡笑』（写、広本系）巻四「唯あり」第八話「宗祇東修行の道にて、人謎をかくる」、元禄三年刊『鹿の子はなし』中の八「よぬけの次兵衛」も同様で、これらはいずれも一つの話の中に

一つのなぞ（問答）を取り入れ、話を膨らませるだけの程度に止まっている。一方で、一つの話の中にいくつかのなぞを挿入し、問答を構成する場合もある。たとえば『囉物語』（延宝八年刊）中巻「占の咄し」のように、二つのなぞ問答を叙事展開に利用している例がある（この話も、宸翰本『なそたて』（室町時代成立）「きむかんのくいやう—むかで」⁽²¹⁾など、既成の二段なぞをそのまま利用したものである）。または、『二休はなし』（寛文八年刊）巻之三の八「一休なぞをときて人にたづねあふ事 付・斎旦那難問かくる事」では、男が一体に自分の住所を伝える時に「①濁り川通り②そこ抜け柄杓の町」と二つのなぞを複合した形でなぞをかけるが、①は従来広く流布し答えの種類も多く、②は『なぞのほん』（寛文年間刊）所収のなぞ（答えは、柄杓の底抜けは「柄（え）」と「側（がわ）」が残り、「江川」を使っている。一方、なぞ問答の取り入れ方において、やや特殊な例に、『竹斎はなし』（寛文十二年序）下の第十三「竹斎去方へ日待に行事 并なぞの事」がある。これは竹斎が日待ちの寄合に参席し、日待ちの慰みに髭男とお互いになぞ問答を繰り広げる話だが、なぞ問答を文章におりこんでおらず、なぞの間を上段に、答は下段に掲げており、既成のなぞなぞ集と同様の体裁をとっている。目的は咄の内容よりも、な

ぞの揭示にある（既成のなぞが多く、また、その大多数が元禄頃成立『新かわりなぞづくし』所収のなぞと重なっている）。要するに、以上のいずれの話も、既成のなぞを摂取してなぞ問答をそのまま本文に出す形の話が多く、話の面白さも取り入れられるなぞの内容自体に依存しているにすぎない。すでに西鶴の時代には、二段なぞの創造と享受は沈滞期に入っていたのであり、二段なぞの資料の多くは、その資料独自のなぞを載せるものではない。一般に他の資料と相当数のなぞを共有している⁽²³⁾という具合であった。

これに対して「不思議のあし音」は、既成の二段なぞの内容を話の運びのひとコマとして挿入して提示したり、登場人物が話の中でなぞをもつて問答を交わしたりするような設定とはなっていない。物語の中になぞ問答の様式と発想が、登場人物達の対話とは別の位相において（すなわち物語世界内で、月待講衆にとって盲人の発言は〈なぞ遊び〉として自覚されてはいないが、聞き手にはそれが認知されるように）巧みに溶け込んでいる。なお、広嶋進は本話の文章における句点の打ち方に注目し、「句点が声を出して読むための息つきではなく、音や形のイメージを想像させる「間」のために打たれているのではないか」と指摘しており、傾聴に値する。本話の語りのテンポは句点の表記の仕方と相まっ

て、なぜ問答の様式を享受するに相応しいものになっているといえよう。

また、なぜの答えの材料については、古典など・民間伝承のなどでは、主として動植物・日常の道具・地名等に限られていたのに対し、西鶴の話では市井の世態を反映する人物達が素材となっている。(「おかた米屋」に至っては、同時代の米商人の商行為・習俗、また旅中の服装風俗などを取り入れて、かなり手の込んだ内容となっている。そして、なぜの型からいえば、〈下女と小娘〉・〈高足駄の行人〉は、民間伝承のナンセンス的描写型と見立て型である。一方、最初の組〈男と産婆〉と最後の組〈おかた米屋と下人〉については、男と女という組合わせも共通しながら、座中の人々は一見したところで、いずれも正体が分からず、あるいは錯覚せざるを得ない。そのような対象に、一節切の盲人は足音から、男女・老若の分別・その人物の心理までも洞察する。つまり、最初と最後の人物の登場の仕方・なぜの提示においては、凡人・非凡人のまなざしという見ることの二重構成を契機にして、奇抜ななぜの設問を作り上げているのである。二階での遊興が、ほかでもない「吉野の山」を盲人が吹くことから始まっているのも、「吉野のお山を、雪かと思えば、雪ではあああああらでむ。やこをれ

の花あのふ、きいよのむ、…」と雪かと思つたら、良く良く見ると真相は桜であつたという歌詞からして、話の趣向を暗示するような布石とも考えられる。

こうした四組の順序の立て方にも、配列の効果が図られている。最初の一组から三組まで徐々に談笑的雰囲気をもりあげ、最後には、山伏の多聞院の祝言に得意満面の顔になった北国屋の主人と月待の遊興に耽つた座中の人々とは、夜の遊興の最中に、商機を狙つて機敏に活躍する米屋の女主人に虚をつかれ、話は落ちに達するのである。喜劇的な場面が構成される最終場面において、特に教訓的な言辭は挟まれていないが、一日の油断と怠りへの一寸した警句として、西鶴説話の談理的姿勢が見られなくもない。それは何よりも、なぜ問答形式を取り入れることで、人物に焦点を当てる劇的な効果が生み出されたゆえであつた。

おわりに

「不思議のあし音」は、北国屋の主人と月待講衆と、一節切の奇人が四組の足音を聞き、正体を突き止めていくという素材の新奇さが際立っている。だが、咄の焦点は、遊興の場で活躍する盲人の特異な才能や人格への礼賛に収斂するのではない。この話のおもしろさは、まず、なぜ問答

の形式と発想様式を巧く取り込んだ、表現の仕方にあるのであり、西鶴もそう読まれることを期待して話を編み上げていったとみるべきであろう。作中には、なぞの提示と解明という遊びの場が見事に形成されており、読者もまた、なぞの解明に立ち合うことになる。本話において、西鶴小説の話術的な構成を見ようとするならば、言い換えて、本話の咄としての面白味を実感するとすれば、それは、なぞ問答の形式を感知することから始まるのであろう。

【注】

- (1) 中村幸彦「第三章 口頭話体の様相 西鶴の話術」(引用は『中村幸彦著述集』、中央公論社、一九八二所収から。初出は「特集 西鶴世界」『国文学 解釈と鑑賞』一九六九・一〇)。
- (2) 富士昭雄「『諸国はなし』の方法」(初出は『国文学 解釈と鑑賞』一九七九・六、のち『西鶴と仮名草子』笠間書院、二〇一一に再録)、富士昭雄『決定版対訳西鶴全集』(明治書院、一九九二)の注。
- (3) 『新日本古典文学大系 好色』二大男 西鶴諸国はなし 本朝二十不孝(岩波書店、一九九一)の井上敏幸の注。この観点は『新編古典文学全集 井原西鶴集②』(小学館、一九九六)の宗政五十緒の頭注にも同様。
- (4) 西鶴研究会編『西鶴諸国はなし』(三弥井書店、二〇〇九)の染谷智幸の担当解説。
- (5) 前田金五郎「近世文学雑誌 十三 右望都」『近世文学雑誌』(勉誠出版、二〇〇七)参照。
- (6) 延宝四年の逸話で、「よも一」が若き時の日乗上人の言いぶりを聞いて、将来出世することなど予見する内容。日乗上人の日記の元禄十一年正月二十八の条に出てくる(加藤康昭「第二章 一節 呪術的宗教者としての盲人」『日本盲人社会史研究』、未来社、一九七四に紹介されている)。
- (7) 馬淵卯三郎『糸竹初心集の研究―近世邦楽史研究序説』(音楽之友社、一九九二)。
- (8) 『糸竹初心集』上巻「当流」節切之事、付虚無尺八之事には、一節切中興の名人で最も名高い大森宗君(勲)に至るまでの伝統の系譜を具体的に記す。そして序文(筆者不明)には「こ、に中村宗三といふもの有。幼より目しゐて色をみず、瓶をわるよはひより、理にさとく、耳を以て目とする事、人にすぐれたり」と著者の中村宗三が紹介されている(寛文四年刊の影印本、『日本歌謡研究資料集成 第三巻』、勉誠社、一九七八所収による)。また、宗三については「伏見ノ住鳥山氏何某カ絲竹初心抄トヤラ云書ヲ板行セシ」(『筑紫事秘録口訣』「一七二六」という言及があるのみで、本名

をはじめ生い立ちは詳らかではない（馬淵卯三郎の調査による。注七の前掲書）。

- (9) 引用は、朝倉治彦編『仮名草子集成 第一巻』（東京堂出版）による。

- (10) 飯田道夫『二十三夜待』『日待・月待・庚申待』（人文書院、一九九一）。

- (11) 『多聞院日記』『文明十年より元和四年まで現存』には、十七日から七日の間に毎夜月を拝んで、「晴れ曇りと月のお形のいろいろによって一年間の吉凶を卜」する「七夜待」の風習が記されている（柳田國男『年中行事覚書 二十三夜塔』『定本柳田國男集 第十三巻』、筑摩書房、一九六九）。

- (12) 桜井徳太郎『第二編第一章三節 民間信仰の講』（『講集団成立過程の研究』、吉川弘文館、一九六二）参照。

- (13) 鈴木棠三『第一章 などと文芸』（『などの研究』、講談社、一九八一）参照。

- (14) 「なぞ」の引用は、鈴木棠三編『中世なぞなぞ集』（岩波書店、一九八五）による。なぞの形式分類については、鈴木棠三『第一章 などと文芸』（『などの研究』、講談社、一九八一）及び、鈴木棠三『第四章 なぞ』（『ことば遊び』、中央公論社、一九七五）参照。

- (15) 引用は、鈴木棠三編『新版ことば遊び事典』（東京堂出版、

一九八一）による。各地方で採集された二段なぞ（単式なぞ）は「二段なぞA」に分類されている。

- (16) 注十三の前掲書の「第一章 などと文芸」より引用。また「第十二章 民間伝承のなぞ」も参照。

- (17) 川野辺寛の『閩里歳時記』（安永九年序、写・二巻）の「九月二十三日」の項目に記している月待の風習に、人々が月待ちをしながら「器に水を盛、頭に戴き、屋の上に立もある」とあり、二十三夜の月待の民間信仰の儀式と高足駄の行人の立行とは類縁性が見られる（『続日本随筆大成別巻―民間風俗年中行事・上』、吉川弘文館、一九八三）。寛文八年刊『せつきやうかるかや』所収「高野の巻」の空海の誕生説話にも、二十三夜の月待の信仰風習との関連が見える。弘法大師の母「あこや御前」が二十三日の夜に屋根の上にのぼり高足駄を履き、頭上には手桶に水を入れて月を待つ苦行をすること、懐妊できたと伝えている。

- (18) 高槻泰郎『近世日本における相場情報の伝達』（郵政資料館研究紀要第二号、二〇一一・三）参照。のちに『近世米市場の形成と展開』（名古屋大学出版会、二〇二二）に所収。

- (19) 高槻泰郎『近世期直轄市場の連動と統合―大坂堂島米会所と大津御用米会所―』（社会経済史学七五・三、二〇〇九・九）。のち注十八の前掲書に所収。

(20) 注十八の前掲書の「第七章 幕府直轄米市場の連動と統合」に実例が報告されている。

(21) 注十五の前掲書『中世なぞなぞ集』による。

(22) 注十三の前掲書。

(23) 吉見孝夫「二段なぞ資料、狩野文庫蔵『新板なぞづくし』」(札幌国語研究・五、二〇〇〇)。

(24) 北国屋は伏見西部の「米穀問屋か」とする説(『新編古典文学全集 井原西鶴集②』、小学館、一九九六)、北国屋のある「問屋町」は安永九年刊『伏見鑑』に見える「塩谷町・大津町・聚楽町」あたりの「問や町」とする説がある(『西鶴選集 西鶴諸国はなし 翻刻』、おうふう、一九九三)。しかし北国屋の名は『伏見鑑』の「問や町」には記載がない。

「問屋町」が町名でないとすれば、北国屋は伏見・京橋にあった万物問屋を兼ねる本陣「北国屋新右衛門」の可能性もあるか。『伏見鑑』には「伏見本陣」として木津屋与左衛門・大塚小右衛門・北国や新右衛門・富田や四郎左衛門の名が見え、うち木津屋・大塚・北国屋は「万物問屋人名」の項にも見える。伏見の本陣については元禄二年刊『京羽二重織留』・延享四年「伏見奉行触書」「恩知柳営秘鑑」参照。

〈付記〉西鶴作品の本文はすべて『定本西鶴全集』(中央公論社)によったが、引用に際し、漢字は通行の字体に、句読点や仮名の清濁もそれぞれ改めた箇所がある。振仮名も一部省いた。